

# 宮城県・広域TMRセンター アップルのその後を追う 1

宮城県の広域TMRセンター・アップルは、生産者が立ち上げたTMRセンターを(株)富士飼料（本社：宮城県岩沼市）が継承し、地元密着型のTMRセンターとして展開してきた経緯を持つ（本誌2010年9月号参照）。今回はアップルのユーザーを訪ね、TMRセンターを利用するメリットを聞いた。東日本大震災は多大な被害を生み、酪農の現場では停電や断水といったライフラインの寸断、飼料供給網の混乱などによって、生産性に大きな影響を与えた。そうしたなか、宮城県にある広域TMRセンター・アップルを運営する(株)富士飼料は、一日も早く生産者へ飼料を供給すべく、全力で震災対応に当たり、約1週間で供給を再開したため、アップルのユーザーへの被害も最小限ですんだ。



現在、アップルのユーザーは、宮城県5軒、福島県1軒の計6軒で、いずれも平均で1万~1万2000kgの高泌乳を実現している生産者だ。また、体細胞数も低く、10万台前半で推移している経営が占める。震災後は停電と断水により牛にも経営的にも相当なダメージを受けたが、震災から半年が経過した現在、落ち着きを取り戻し、乳牛の調子も徐々に回復し、落ち込んでいた乳量も回復しつつある。

## 夏場でも高泌乳を維持できたのは 安いエサに切り替えなかったこと

●ディフェンドファーム 佐藤酪農 佐藤 護さん

### 【佐藤酪農の概要】

経産牛54頭（うち搾乳47頭）  
育成牛35頭  
搾乳牛1頭当たり乳量35kg/日以上

「給飼体系をTMRに切り替えてから12~13年になります。当初はコンサルタントを頼んで1万kg牛群を目標にスタートしました。最初にカウコンフォートの重要性を教えられました。そして最終的にそれだけの高泌乳を実現するには「エサ」、要するにTMRしかないということで導入しました。当時すでにフリーストールでTMRを給与している牧場があったので、近隣の仲間と共同で調製して、各戸に配送する方法で始めました（後にアップルに継承）。ここ10年は35kg/日以上をキープしており、夏場も変わることがありません。これはエサもそうですが、カウコンフォートによる部分も大きいと実感しています。最初に1万kg台を実現したとき、さまざまな面で牛に対するフォローが必要でした。ベッドを直したり、夏場の暑熱対策で細霧システムを設置したりと、牛のためになることなら何でもしました。あとは乳量が高くなると、どうしても乳成分が下がってしま

「メリットは常に安定したメニューと品質でフォローしてくれること」という佐藤さん



うので、それを改良やTMRの成分を調整することでクリアしてきました。問題に直面したときに、TMRセンターに相談して、配合の割合を変えたりするのもアップルのメリットですね。アップルのTMRセンターは、ベースになる部分は同じですが、個々の状況に応じてメニューを調整してくれることが大きなメリットです。とくに、飼料の品質を落とさなかったことは大切です。折からの飼料高騰でも、飼料原料を変えたりせず、多少高くても同じ品質のものを給与し続けてきたことがポイントだと思います。安いエサに変えても、そのときはそこそこの牛の状態も安定して、確かに一時的にコストが下がりますが、後々、乳量や繁殖に影響が出てくるのは目に見えています。これは酪農家としてむずかしい選択ですね」と佐藤さんのエサとカウコンフォートに対する信念は熱い。

### 奥さんも肌身で実感！

「分離給与の頃と比べて、労力負担が明らかに少なくなったことがメリットですね。それと何よりも、牛

が選び喰いをせずに、くまなく食べてくれるのが嬉しい。選び喰いをしないということが高乳量につながっているのだと実感しています。ゆとりができたことで、その分、牛舎に牛たちの様子を頻繁に見に行ったり、エサ寄せをした



選び喰いをしないTMRに満足

りするようになりました。牛は、見れば見るほどに結果が選ってくると思います」と奥さんの美恵子さん。ご夫婦の、エサとカウコンフォートに対する情熱は熱いものがある。

## 1人酪農を可能にするTMR

長井牧場・長井 勉さん

### 【長井牧場の概要】

経産牛34頭（うち搾乳29頭）、育成牛25頭  
搾乳牛1頭当たり乳量34kg/日



1人酪農で高泌乳を実現する長井勉さん

長井さんは、大学卒業後に札幌で住宅のリフォーム会社で営業職を2年経験した後に、地元で就農した。そのときは実家の牧場ではなく、少し離れた離農跡地に居抜きで入植した。「アップルのTMRは高い泌乳能力を持つ牛に合わせて、設計を調整できることがメリット」と言う。

「TMRの導入は8年になります。うちは労働力がな

泌乳能力に合わせて調整できるのがメリット



いことから、TMRの導入を決めました。エサ給与から搾乳まで、すべて1人で行なっています。うちでは乾乳牛も含めて全頭に、輸入乾草を給与していますが、その在庫量が少なくすみ、そのスペースを哺育・育成牛用に有効活用できます。将来的にはスタッフを雇用して増頭するか、あるいはこのまま1人で頭数を減らしていくかのどちらかですね。ある程度、将来的な社会情勢を見据えて判断しないととも言えないです」と1人でも34kg牛群を管理している長井さんだが、まだ小さいお子さんが将来後継者になることを期待しているように見えた。

株式会社 角田TMRセンター



TMRセンター・アップル 震災により一部損壊があったものの、すぐに稼働した



ルーサン乾草は成分のバラつきを考慮して、必ず2業者から仕入れたものを使う。また新たにオーツとルーサンをミックスした粗飼料だけのTMR「シンプル」を、育成用、乾乳期用、繁殖農家向けに発売した。こちらは月に100本/200kgにもなる。TMRにはカーマンナを300g/頭入れることで高泌乳と繁殖成績向上を実現している



(株)富士飼料・ファームアドバイザー津田宗彦さんは、ユーザーとのコミュニケーションの中で、問題点やニーズを聞きながら、さまざまな改善・提案をしている

佐藤さんや長井さんのように、高泌乳を追求するためにエサ給与から牛の健康管理、カウコンフォートをトータルでバランス良く管理することはむずかしいこと。さらに、労働力に問題を抱える農場も少なくない。アップルのTMRのユーザーは、そんな数々の問題点に対して、良きアドバイザーである(株)富士飼料の津田宗彦さんや、アップルTMRユーザー同士が円滑に情報交換をすることで、より高いレベルの飼養管理を実現し、地に足のついた堅実な酪農経営を実践している。

「これからもユーザーさんのお役に立つために、生産者のモチベーションを上げること、次の代へ経営をつないでいただくことこそ、われわれ飼料メーカーの責任だと思っています」と津田さんは話す。

《つづく》

(取材=前田良)